

# Interview

## ヘンデル研究の世界的權威 自身の校訂譜によるオラトリオ世界初演 クリストファー・ホグウッド

【指揮】  
ききこ・文三澤寿喜  
写真：山本博道

この度ホグウッド氏の来日に際し、ヘンデル研究者である三澤寿喜氏にインタビューをお願いしました。いわず知られたヘンデル演奏及び研究の第一人者であるホグウッド氏と、ヘンデルに関する多くの著書を執筆し、ヘンデル・フェステバル・シヤパンを主宰する三澤氏、そんなヘンデルのベネチヤリストであるオラトリオ人ならではの、掘り下げられたヘンデルの裏話をお届けします。  
(編集：藤)

クリストファー・ホグウッド氏は演奏と研究を極めて高い次元で両立させている稀有の音楽家である。「モーツァルト交響曲全集」や「メサイア」の録音と「ヘンデル」や「宮廷の音楽」の著書の印象が強過ぎ、我が国はとくに古典派以前の音楽の講義と捉えがちな。しかし、氏は指揮には上座、へのこだわりはなく、研究はルネサンスから現代まで多岐にわたっている。今回は「ヘンデル・フェステバル・シヤパン」の招聘により、ヘンデルのオラトリオ（陽気の人、ふきぎの人、中曲の人）の指揮のために来日された。2010年5月13日、浜崎宮前日ホール…佐竹由美、波多野睦美、辻裕久、牧野正人、キヤノン・コンサート室内合唱団&管弦楽団。

インタビューは公演前日の2月12日に由行なわれた。通訳は井上田裕佳子さん。ホグウッド氏はお洒落で、ウィットに富む

温厚なイギリス紳士であるが、今日の遠慮のない辛口お喋りが飛び出た。個々の奏者を尊重し、

全員参加がモットー

「明日がいよいよ本番ですが、これまでのリハーサルを進め方を拝見して、演奏者一人ひとりの表現を最大限尊重しているように思受けられました。ホグウッド（以下H） そのとおりです。交響曲のような編成の管弦楽の場合には必ずしもそのような訳にはいかないの

## オラトリオ世界初演 クリストファー・ホグウッド



ですが、各楽器の優れた奏者が集まったこのような小編成の古楽オーケストラの場合は、一人ひとりのそなえている技術や表現を確に目録め、まとめていくことが重要だと考えます。

特にナチュラ・ホルン、ナチュラ・トランペット、フラウト・トラヴェルソ、チェロ、ボジティブ・オルガンなど、アリアを彩るオブリガート楽器奏者に対して、そのような姿勢が窺われたように思いますが。

H 必ずしも「常に」という訳ではありませんが、時には、様式上、技術上の観点

から、別の解釈や奏法を提案することもありました。しかし、その際でも、個々の奏者は一人ひとりが独立した奏者であることを尊重し、あくまで提案するというのが姿勢をとりました。今回はおよそ50名の奏者（器楽27、合唱22、独唱者4）での演奏ですが、このような演奏会は、指揮者一人の音楽であってはいけないと思っています。自分だけの解釈で演奏をしたければ、私はハーシコードの独奏をします。もし、二人で演奏するとなれば、そこには二通りの個性があり、二通りの解釈が生まれ、それをいかに一体化し、

調和させていくのが重要な問題となりま  
す。そして、50人のアンサンブルであ  
れ、全員がその作業に加わっていくこ  
とになります。

## 古楽もモダンも同様の存在

——次に経歴についてお尋ねします。氏  
は1960年代にロンドン古楽アンソ  
ニエトに加わり、1973年には自らエ  
ニエト室内管弦楽団を設立しました。こ  
のように、音楽のキャリアを楽団で開始  
し、当初は古楽演奏にはとどむる精力を  
傾注しましたが、その後、古楽以外にも  
活動を拡大し、現在では、現代音楽にま  
ですき幅広いレパートリーをもつ指揮者  
として活躍されています。指揮するオー  
ケストラも古楽からモダン・オーケスト  
ラへと拡大し、レパートリーもパロック  
や古典からロマン派、近現代へと拡大し  
たのはいつ頃のことだったのでしょうか？  
また、そこには何か契機があった  
のでしょうか？

H それは大きな誤解です。私は古楽か  
ら始めてモダンへとレパートリーを拡大  
したのであります。私は16歳でスト  
ラウインスキーを演奏しましたし、私が  
最初に所属したオーケストラもアカデミ  
ー室内管弦楽団で、モダン・オーケスト  
ラでした。私はそこに10年間所属し、そ  
の間、東京にもツアーで訪れています。  
そこでは、パロック以外のレパートリー  
も数多く演奏されました。古楽のエン  
シエント設立後もそれと並行して、19  
80年にはロスアンゼルス交響楽団の  
指揮者も務めていました。これはまっ

く古楽・オーケストラではなく、モダン・  
オーケストラです。これもよく誤解され  
ていますが、私が音楽の専門家なのは  
なく、オーケストラのメンバーが古楽の  
専門家なのです。指揮者としての私にと  
って、古楽・オーケストラもモダン・オー  
ケストラもまったく同様にやりがいいの  
な仕事です。

——研究においても実に幅広い活動を展  
開されています。現在、ヘンデルの新  
集のために、(聖セリアの祝日のため  
のオード)の校訂作業に取り組んでいま  
すが、そのほかに取り組んでいる研究課  
題は何でしょうか？

H 現在、校訂作業中のものはバーセル、  
ジュミニアーニ、メンデルスゾーン、マ  
シエレス、レオポルト・コジエフ、マ  
ルティヌイ、ストラウインスキーなど  
です。

## ヘンデルの実像 ヨーロップでの認識

——幅広い研究・演奏活動を行なってい

ることを承知の上で、あえての質問です  
が、ヘンデルは今後も重要な研究・演奏  
の対象であり続けるのでしょうか？

えに、人気が高まってきました。そのお  
除で、ヘンデルのオペラも採り上げられ  
るようになってきたのだと思います。

## ハッピー・エンドは 当時の慣習的な作劇構造

H ヘンデルは、日本では名前には有名な  
が、相変わらず「マイエ」だけの作  
曲家であり、実像が十分に知られていな  
い作曲家ですが、それはヨーロップでも  
同じでしょうか？

H いえ、違います。ヨーロップでは、  
モーツァルトが「レクイエム」だけの作  
曲家ではないことが知られてきたよう  
に、ヘンデルについても実像がかなり知  
られるようになっていと思っています。

——特に、何世紀もの間、問の中にあっ  
たヘンデルのオペラが、この10年ほどの  
間にヨーロップの多くの劇場のレパート  
リーとして定着するようになってしまし  
たが、その理由はどこにあるとお考えで  
しょうか？

H ここ10年ではなく、もっと早く、恐  
らく20、30年前からのことだと思います。  
この間、オペラ自体が、その官能性のゆ

——ヘンデルのオペラは当時のイタリ  
ア・オペラ・セリアのハッピー・エンド  
の習慣を厳格に守っていますが、時に、  
このハッピー・エンドはドラマ上の弱点  
であると言われます。ヘンデルは自らも  
台本作成に一定程度関わっていたと思わ  
れます。ということは、ヘンデル自身も  
そのようなドラマ展開に満足していたと  
いうことでしょうか？

H そのとおりです。ハッピー・エンド  
は当時の慣習的な作劇構造として受け入  
れられていました。

——厳格な慣習をもつオペラ・セリアは  
ともかく、その慣習からは自由であった  
はずのヘンデルのオラトリーにおいても、  
ハッピー・エンドの慣習は濃く影  
響を与えているように思います。たとえ

ヘンデルは宗教的な題材による英語  
の台本を用い、更に合唱を加えたこと  
で当時の聴衆に受け入れられました。



ば、世俗的な内容ですが、(ヘラクレス)は、ヘラクレスの非業の死で終わるか、もしくは、デージャイラの狂乱の場面で幕を閉じれば、後期ロマン派のオペラ同様の悲劇的な結末となりますが、それをせず、最後に若君同士結婚という、幸福な場面を設定して、幕を閉じます。また、(イエフン)では、聖書の記述を無視してまで、本来いけにえとなるべき娘を教育し、ハンビー・エンドとします。ハッピー・エンドはが時の時代精神と解釈して良いのでしょうか？

H そのとおりです。ヘンデルは18世紀の劇場観客を尊重して来ました。当時の劇場の観客は幸せな気分であ路につきたかったのです。これはオペラやオラトリオだけに限ったことではなく、演劇においても同様でした。シニョリスアのいくつかの悲劇、たとえば(ヘイア王)でさえ、ハッピー・エンドにならざるを、翻案されていたのです。

— 今回、指揮する(陽気の人、ふさぎの人、中庸の人)は、本来、ミルトンの詩によって構成される部分は、「陽気」と「ふさぎ」が論争する第1部までですが、ヘンデルの台本用に、C・ジェネンズが新たに第3部として「中庸」を加え、論争に決着を付けた。これも一種のハッピー・エンドなのではないでしょうか。

H それは分かりません。「陽気」と「ふさぎ」を対照けるミルトンの思想には何も問題は無いのですが、18世紀の思想として、なにが解決をもたらす必要があり、「中庸」が付加されたのだと思えます。



2010年2月13日、浜離宮朝日ホールでの公演。  
写真提供 ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

— この第3部の付加はヘンデル自身も提案したとされます。また、第3部に含まれる二重唱と終曲合唱は、ヘンデル作品中、屈指の名曲とされます。それにも関わらず、彼がこの第3部を気に入らず、実際の上演では(聖セシリアの祝日のためのオード)と差し替えて上演したのはなぜでしょうか？

H それも謎です。単に、歌手が、第3部より、(聖セシリアの祝日のためのオード)の方を歌いたいと言ったのかも知れません。第3部の音楽が素晴らしいのは間違いないです。また、第3部が長すぎたということでもありません。なぜなら、(聖セシリアの祝日のためのオード)は(陽気の人、ふさぎの人、中庸の人)の第3部よりもっと長いのですから。したがって、原因は歌詞にあると考えざるをえません。つまり、第1部と第2部を構成するミルトンの素晴らしい詩と比較すると、ジェネンズが新たに付加した第3部( Moderato # 中庸)の歌詞は、ヘンデルには moderatissimo (あまりに中庸過ぎて、凡庸)と映ったのではないのでしょうか。

### 憂うつきは 今日の滑稽な演出

— ヘンデルは元々オペラ作曲家でした、それが行き詰まった時、オラトリオへと方向を転じました。ヘンデルも可能であれば、それらのオラトリオもオペラのように演技を付けて上演したかったのではないかと推測されます。このことについてどうお考えでしょうか？

